

説教 『ポッと明るい場所』山本 護牧師
聖書 イザヤ書 60：1～2／マタイ福音書 26：6～13

「香油注ぎ」の出来事はすべての福音書が伝えているが、マタイ福音書はこれを幾らか大雑把に語っている。細部の解釈も意味あるが、ここでは何よりも場面の印象を大事にしたい。女は、食事中的イエスの頭に、極めて高価な香油をドボッと注ぐ(マタイ 26:7)。同席の弟子たちは慌てふためき、そんな無駄遣いしないで貧民に施したら有益なのに(26:9)、と責めたてる。だがイエスは泰然として、「わたしに良いことをしてくれた(26:10)」、「わたしを葬る準備をしてくれた(26:12)」と妙に嬉しそうだ。

この場面にどんな印象を持つだろうか。換算すれば三百万円くらいの香油が流れ、ああ、もったいない、と私も思った。だが弟子のような有益性には気が回らず、同時におもしろいと感じた。無茶苦茶な女の行為も、イエスのふるまいも、いいじゃないか、と奇妙な明るさを覚えた。何が明るいのか。

後ろへググッと下がって、出来事の周りを広く眺めてみよう。「香油注ぎ」の直前には、イエスの殺害計画があり(26:1～5)、直後にはユダの裏切り準備がある(26:14～16)。おぞましい暗闇に挟まれ、「香油注ぎ」の出来事には、ポッと明かりが灯っているかのようだ。場所は、らい病人のシモン宅(26:6)、普通の人は近づかない。弟子たちはイエスに従って来たものの、おそろおそろの食事をしていて、弟子たちが踏み込めたのはそこまで。食事中に強烈な香油を注ぐ狂気の沙汰は、さすがに容認できない。弟子や同席の男たちが右往左往する中、香油がべったりのイエスと女は、嬉しそうに微笑んでいる。

女のひたむきで不器用な行為。それを受けとって微笑むイエス。これが暗闇の中にポッと灯っている光源らしい。「神の御心」と言うとは何やら厳めしいが、イエスの微笑みは御心そのもの。なんと柔らかく、なんと痛快で、なんと深い現実への然りであろうか。合理的なこと、有用なこと、計画的な壁を、率直すぎる祈りが突破した。キリストの信仰は、良識や道徳といった人間の段差を突破する。教会になんとか漂う「きちんとした雰囲気」がイエスだと思わないでほしい。これはせいぜい、らい病人の家でめし食う程度に解放された弟子の姿だ。信仰の光源はイエスの微笑みにある。「香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた(26:12)」。女の率直な祈りの行為が、受難を迎える暗い世に光を灯した。

「見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる(イザヤ 60:2)」。劇的な言い回しだが、「主の輝き」「主の栄光」とは、頭から香油を滴らしているイエスの微笑みではないのか。苦しみに拘束された女にとって、あの微笑みは主の輝きであり、栄光であった。「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く(60:1)」。「起きよ、光を放て」。すなわち、あの女のごとく光に仕え、光を迎えよ。女は光ではないが、その祈りが、その無作法な行為が受難の闇に光を到来させた。弟子たちは混乱し挫折したが、光を運ぶ使命を負った。その使命は継続し、私たちが負っている。弟子のようにか、女のようにか。

光を抱えて、受難節の闇へ踏み込んでいく。福音が現されるなら「この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう(マタイ 26:13)」。イエスが何に微笑まれるか、常にイメージしながら先へ進もう。

【おまけのひとこと】

キリストが微笑むと そこがポッと明るくなる それだけに闇の深さを実感する 明るくならなければ分からなかった 見えないことに馴染んでいたから 解放とは 欲していることを識る辛さ